

# 麦野 A 4

—麦野A遺跡群第14次調査報告—

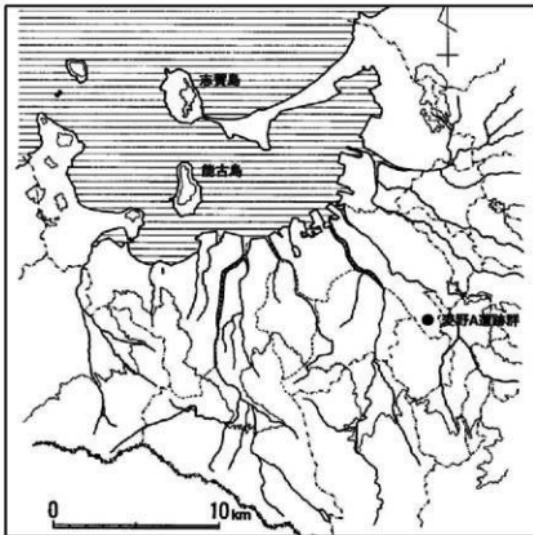
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第859集

2005

福岡市教育委員会

# 麥野 A 4

—麦野A遺跡群第14次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第859集



調査番号 0367  
調査略号 MGA-14

2005

福岡市教育委員会



# 序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸との人、物、文化の交流が絶え間なく続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は奈良時代の集落が中心となりました。今までの周辺の発掘調査を含め奈良時代の大規模な集落が見えつつあり、大宰府との関係も注目されるところです。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 一例 言一

1. 本書は福岡市博多区麦野5丁目5番39において福岡市教育委員会が2003年度に実施した調査報告書である。
2. 調査は荒牧が担当し、荒牧のほか兼田ミヤ子、小野千佳、高手興志子が遺構図面作製を行った。
3. 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、濱田美紀、相原聰子、荒牧が行い、浮遊は大石菜美子が行った。
4. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

## 一凡 言一

1. 本書掲載の遺構方位は国土座標北による。
2. 掲載した遺物は通し番号を付している。  
※表紙題字は柴田志乃さんによる。

# 本文目次

|     |                     |    |
|-----|---------------------|----|
| I   | はじめに .....          | 1  |
| 1   | 調査に至る経過 .....       | 1  |
| 2   | 調査の経過 .....         | 1  |
| 3   | 調査体制 .....          | 1  |
| II  | 位置と環境 .....         | 2  |
| 1   | 周辺の調査 .....         | 2  |
| 2   | 立地と層序 .....         | 2  |
| III | 調査の記録 .....         | 2  |
| 1   | 調査の概要 .....         | 2  |
| 2   | 豎穴住居跡 .....         | 5  |
| (1) | SC02、14 .....       | 5  |
| (2) | SC03 .....          | 7  |
| (3) | SC04、16 .....       | 7  |
| (4) | SC13、19 .....       | 9  |
| 3   | 土壤・井戸 .....         | 12 |
| (1) | SK06 .....          | 12 |
| (2) | SX07、17、18、20 ..... | 12 |
| (3) | SE15 .....          | 13 |
| (4) | SK01 .....          | 17 |
| 4   | 掘立柱建物跡 .....        | 18 |
|     | SB01 .....          | 18 |
| IV  | おわりに .....          | 18 |

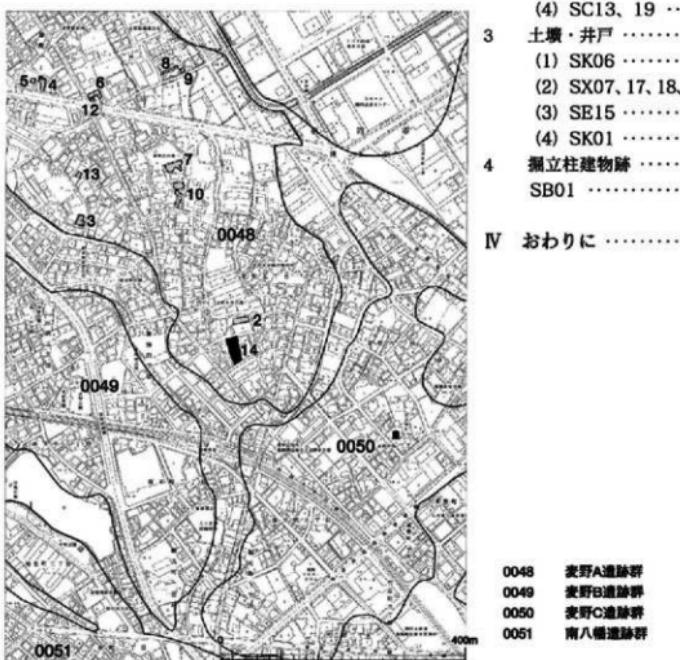


Fig.1 麦野A遺跡群と周辺遺跡 (1/8,000)

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成15年7月30日付で大和ハウス工業株式会社 福岡支店より福岡市博多区麦野5丁目5番39(敷地面積684m<sup>2</sup>)における分譲住宅建設に伴って「埋蔵文化財の有無について(照会)」が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。これを受けて当課で書類審査していたが、その後杭打ちに工事内容が変更されたことから同年9月25日に試掘を行い遺構を確認した。当課ではこの試掘結果と工事内容から建物部分の調査が必要と判断し、両者と施主の藤紀氏との間で協議を重ね、平成16年2月2日より発掘調査を開始することになった。

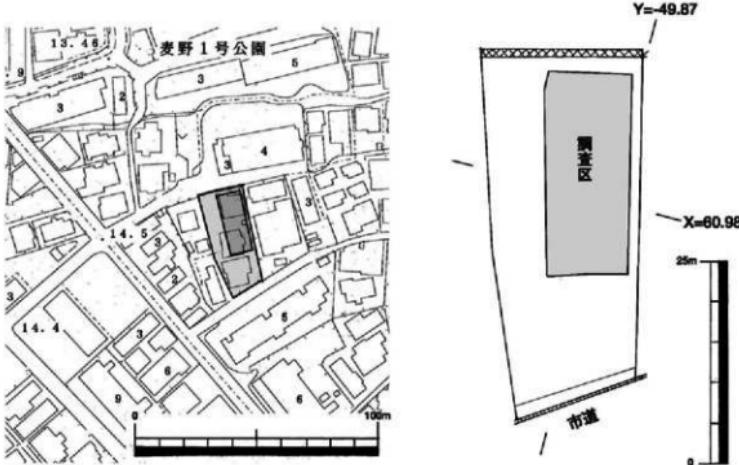
## 2. 調査の経過

上述の通り、調査対象は建物部分に限られ、面積260m<sup>2</sup>を発掘調査した。まず重機によって北側で50cm、南側で20cmの表土を取り去り、その廃土は敷地内で処理した。その後人力によって発掘を進め、約1ヶ月を要した平成16年3月3日に調査を終了した。

## 3. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

(調査主体)福岡市教育委員会 (調査総括)埋蔵文化財課長(前任) 山崎純男 調査第2係長(前任)  
田中寿夫 (庶務)文化財整備課 御手洗清 (試掘調査・協議)事前審査係長(前任) 池崎謙二  
担当 久住猛雄(調査担当)荒牧宏行 (調査作業員)内山和子 黒瀬千鶴 松井一美 安高精一  
小野千佳 高手興志子 兼田ミヤ子 河野一豊丸秀仁 北原由起子 渋谷留雄 濱フミ子  
知花繁代 沖政芳松若 俊美 (資料整理)松下伊都子 小金丸昌世 大石菜美子 相原聰子



## II 位置と環境

### 1. 周辺の調査

麦野A遺跡群のこれまでの調査概要は第8次調査報告（市報774集、P-2）にまとめられているので参照されたい。麦野遺跡群、南八幡遺跡群をはじめ福岡市南部の洪積世台地には8世紀代の竪穴住居を主体とした集落が多く検出される。逆に北側の比恵、那珂、板付遺跡で多く検出されていた弥生時代の遺構が少なく、造成等によって土地が改変された可能性があるようと思われる。また、集落構成も後進的な竪穴住居跡が主体となっていることも特徴的である。

古代の遺構で第7次調査で検出された8世紀後半から9世紀前半の時期といわれる大型の掘方による欄列と溝さらり門は注目される。その規模や遺構の性格から官衙的な性格が推察されている。

今後、古代集落の成立の背景を推察するにあたって、このような地方律令機構や近くに位置した大宰府との結びつきを把握していく必要がある。

### 2. 立地と層序

略東西約10m、南北約25mの長方形をした調査区内の検出面であるローム層の標高は15.5～16.0mである。このローム層は緩やかに北側へ下降し、上層は落ちた北側に黒色土が最深で16cm堆積するが、他は現代客土層のみである。調査区内を含む同敷地の北側隣接地は約2mの比高差で段落ちし、石垣がつかれている。



Ph.1 調査区全景 (南から)



Ph.2 SC02、SC14 (南東から)

## III 調査の記録

### 1. 調査の概要

周辺の調査同様に古代の竪穴住居跡が中心を占め、検出された遺構は古代（8世紀中頃～後半）の竪穴住居跡10軒、土壙2基、掘立柱建物跡1棟、10世紀前半の井戸1基である。遺構は北側では木根と柱穴が散在する程度で、竪穴住居跡等は南側に多く、建て替えによるとみられる同地点での切合いか検出された。竪穴住居跡のカマドは竪穴部分のコーナーに設置され、煙道が長く外部へ延びる特徴をもつ。

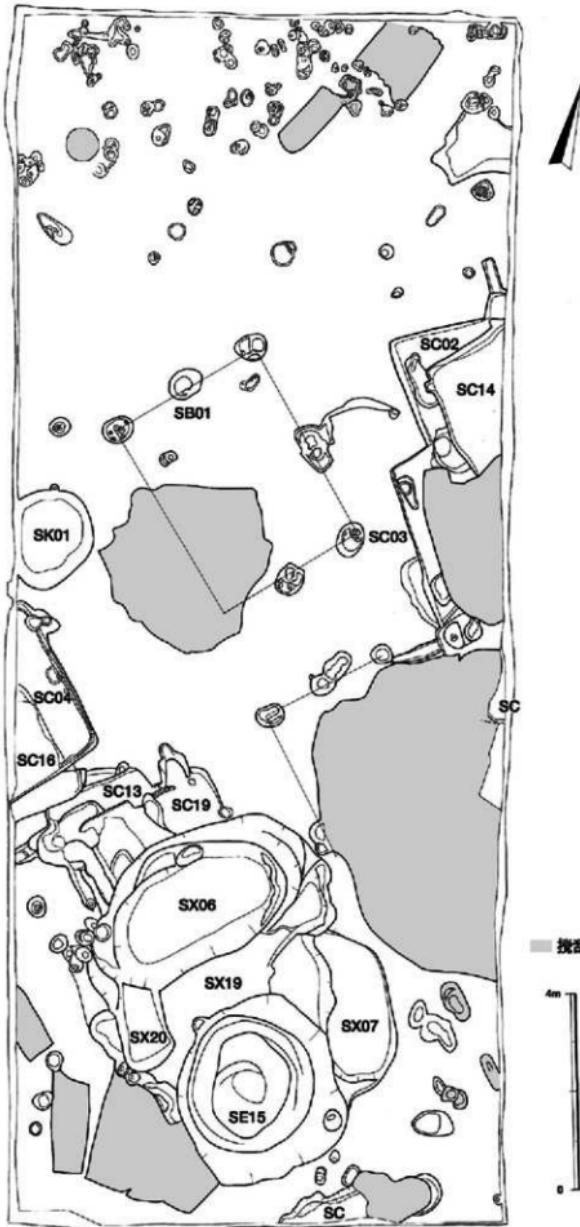


Fig.3 造構全体図 (1/100)

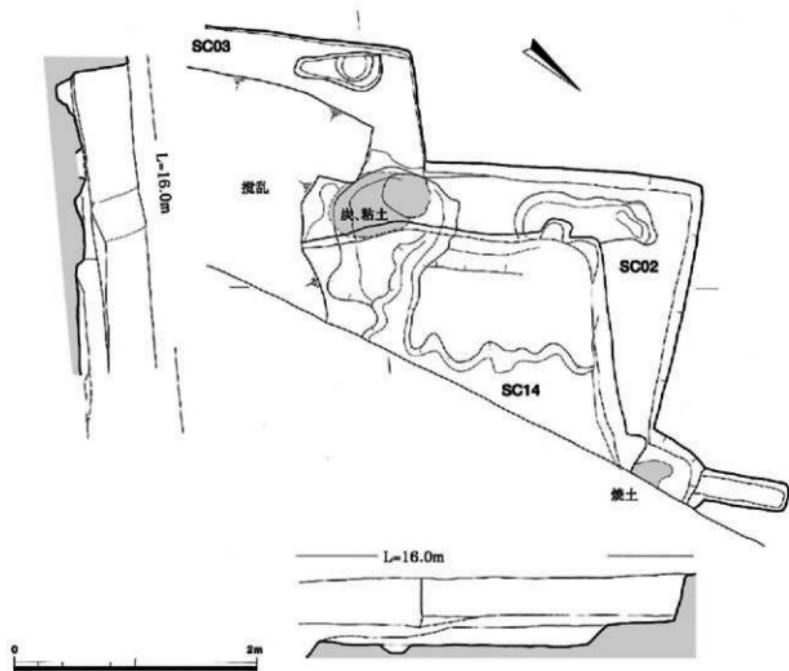


Fig.4 SC02、SC14実測図 (1/40)

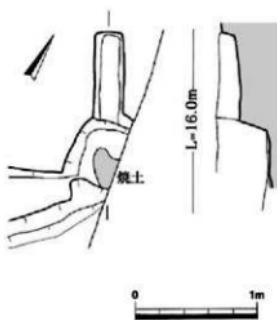


Fig.5 SC02カマド実測図 (1/40)



Ph.3 SC02、SC14実掘 (南西から)

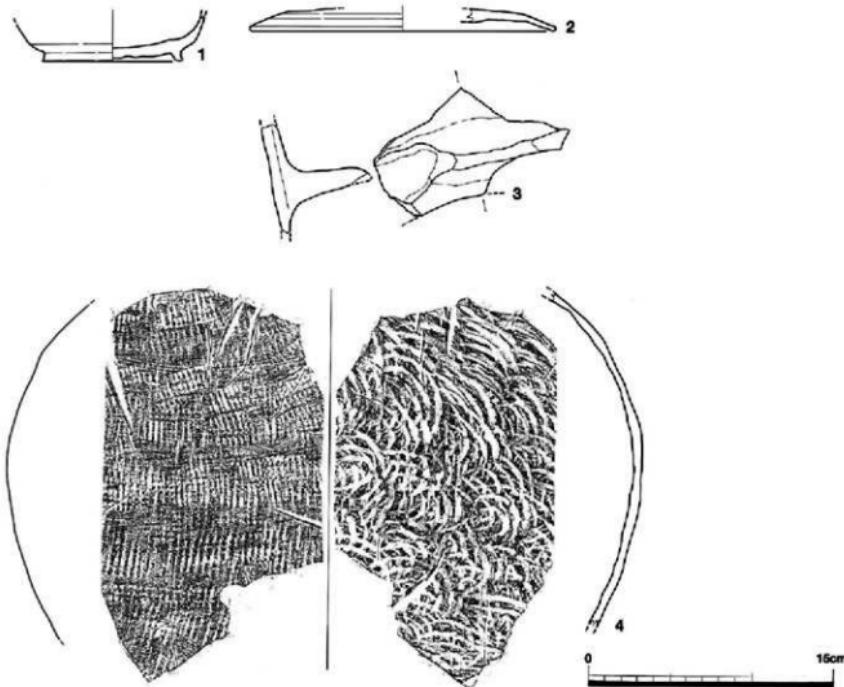


Fig.6 SC02出土遺物実測図 (1/3)

## 2 堪穴住居跡

### (1) SC02、14

調査区中央部の東壁際で検出された。SC02はSC14と重複して切合し、南側をSC03と切合っているがその大半が壊乱によって破壊されている。SC02は深さ38cmが残り、カマドは北西側に設置され、恐らくコーナー部に位置しているとみられることから北辺はおよそ3mの規模と考えられる。西辺の南側に粘土塊と焼土粒や炭が検出されたが、これは位置からSC14のカマドと考えられる。従って、SC14は検出時には確認できなかったが、SC02と14を切っているものと判断される。SC02のカマドは燃焼部の最大幅（外法）が推定70cm、堪穴外部への延長が50cmを測る。さらに幅26cm、長さ70cm、深さ20cmの煙道が接続している。燃焼部の内側にはカマド壁体を構築した粘土は確認できなかったが、床面には焚口の焼土を検出した。SC14のカマドとみられる西辺の粘土塊は散在した状態で、壁体を復元することはできなかった。

SC02、14何れも貼床土が検出され、北西コーナー部分に落ち込みがみられた。

出土遺物

1、2は須恵器坏、3の移動式カマド底片と4の須恵器壺片はカマド近くから出土した。

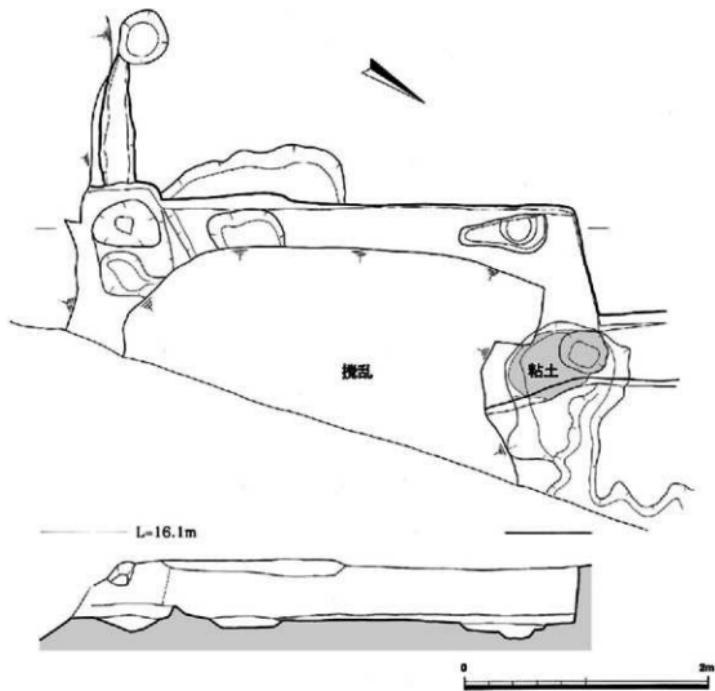


Fig.7 SC03実測図 (1/40)

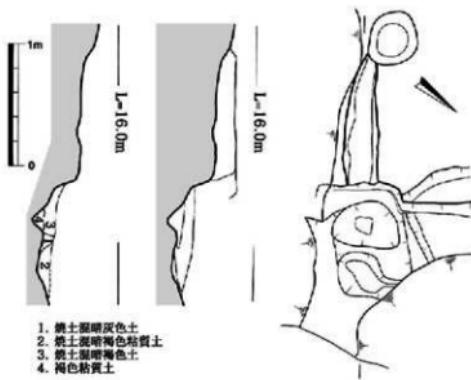
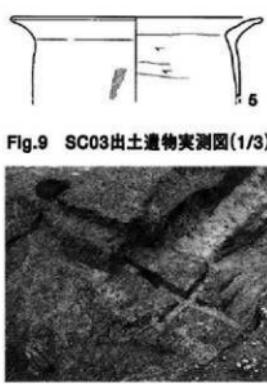


Fig.8 SC03カマド実測図 (1/40)



Ph.4 SC03カマド (南東から)



Ph.5 SC03発掘（南東から）



Ph.6 SC04、SC16（北東から）

る。SC04の壁高は45cm残り、幅約8cmの周溝が巡る。床面のレベルはSC04、16はほぼ同じであるが、SC16の貼床が深さ7cm程度検出された。

SC16のカマドは他の堅穴住居跡と異なり北東辺のSC04の壁から出た位置に設置されていた。南側はSC13によって壊され、SC13の床面に炭や焼土が検出された。燃焼部の幅（外法）は68cm、煙道の長さは60cm以上である。堅穴部にカマド壁体の一部とみられる粘土塊が検出された。

#### 出土遺物

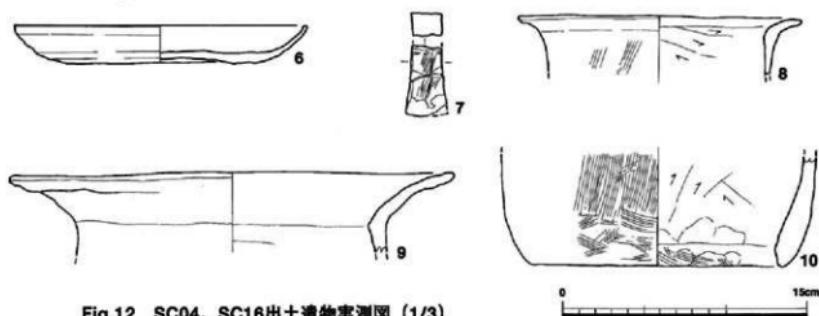
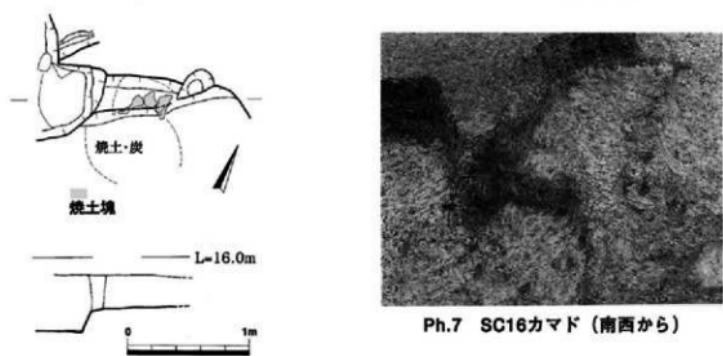
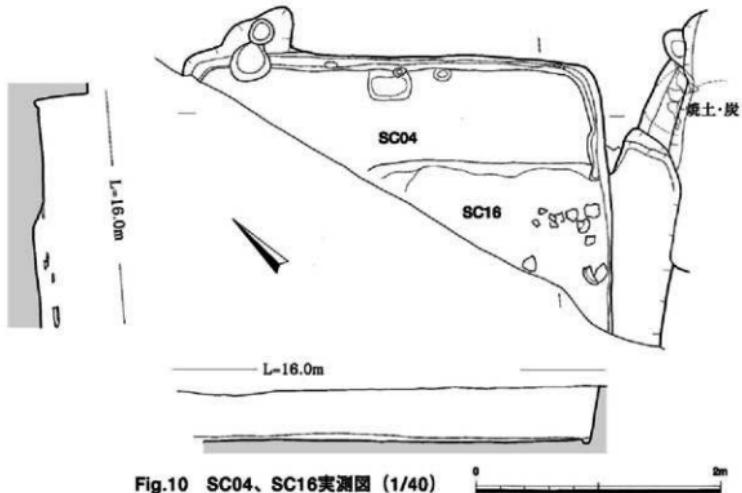
6～10はSC16のカマド周辺から出土した。6は土師器皿、7は灰白色を呈した粘板岩製の磁石である。8、9は土師器甕、10は土師器瓶の底部である。

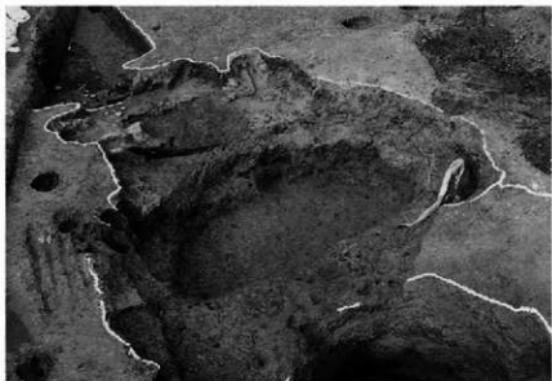
#### (2) SC03

調査区中央部の東壁際で検出された。中央の大半が攪乱によって破壊されていた。西辺は4.18mを測り、南北コーナーにカマドが設置されていた。壁高は37cm残る。カマドは燃焼部の最大幅（外法）約70cm、堅穴外部への長さは15cm程度で短く、それに幅35cm、長さ約110cm、深さ16cmの煙道が接続していた。カマド壁体は埋土と近似していたためか検出できなかったが、床面に幅56cmの焚口部の焼土が検出され、壁体の規模が推定される。出土遺物は少なく土師器甕5は床面からの出土。

#### (3) SC04、16

調査区中央の西壁際で検出された。SC04、16は同方向に重複しているが、その切合は床面で検出し、前後関係は発掘時では確認できていなかった。しかし、調査区西壁の土層断面に不明瞭ながらSC16の壁の立ち上がりがみられたことやSC16のカマド焚口周辺の遺物が集中して出土したことからSC16が後に構築されたものと判断され





Ph.8 SC04、16、13、19（南東から）



Ph.9 SC16カマド、SC13カマド発掘（南西から）

#### (4) SC13、19

調査区の南側で検出された。3軒の竪穴住居跡が切合い、南側はSX06によって切られている。カマドはSC13では南辺に、SC19では北西辺に構築されている。SC13は拡張され、カマドも同じ位置に再構築された可能性がある。そのため、内側の竪穴住居跡をSC13-2として記録した。

SC13の北西辺はSC19のカマドを避け、長さ2.2mと短い。前述のように北西辺の壁際床面にSC16カマドのものとみられる炭が検出された。壁高は17cmが残る。カマドは燃焼部が少しずれた位置の内外に2箇所検出された。外側の燃焼部の幅（外法）は90cmを測り、幅28cmの煙道が接続していた。燃焼部の内側には壁体とみられる粘土と焼土粒が混じた灰褐色土が厚さ約10cmで巡っていた。内部の床面には径25cm程度の焚口の焼土が検出された。近接した南側に淡く赤色化した燃焼部が検出された。幅45cm、奥行きは焼土化していないため不明瞭であるが約1mを程度とみられる。このカマドに接続した竪穴住居跡(SC13-2)の壁はSC19の壁とほぼ重複する位置とみられ、何れに属しているか判断が難しいが、この南側で貼床による2段の落ちが検出され、東側の深く落ちたラインをSC19の壁、外側をSC13-2の壁ともみれる。

SC19はSC02と同じく北西辺のコーナーにカマドを設置している。壁高は25cm残る。検出されたカマドの中では壁体の遺存が最も良く、燃焼部と焚口の袖部に用いた灰白粘土が明確に検出でき

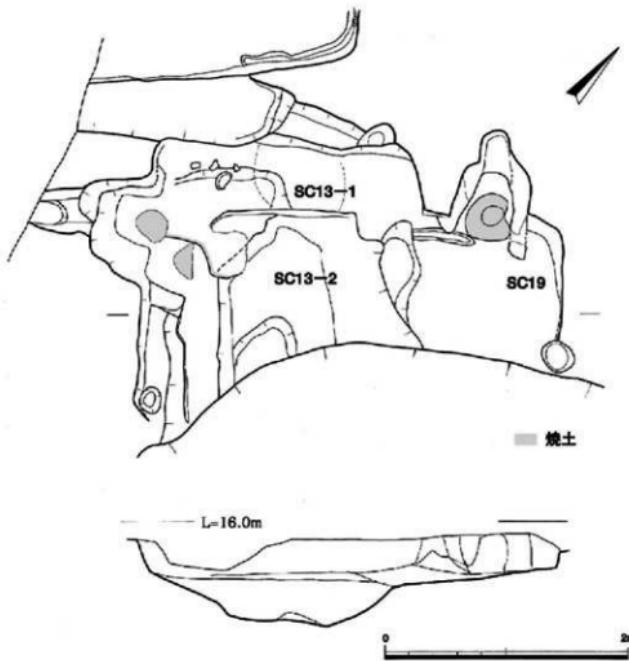


Fig.13 SC13、SC19実測図 (1/40)

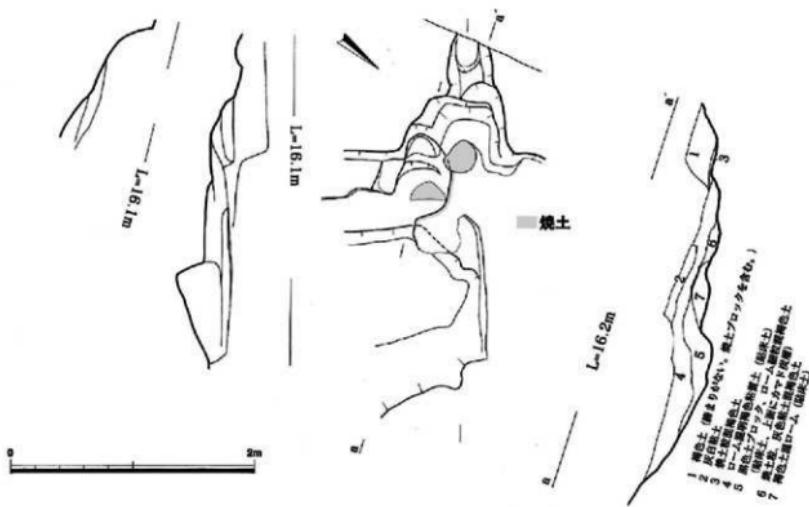


Fig.14 SC13カマド実測図 (1/40)

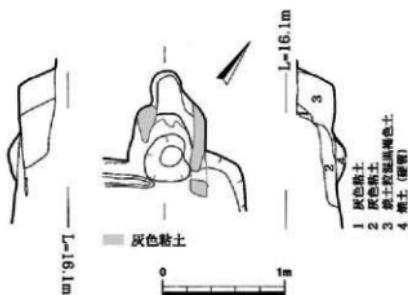


Fig.15 SC19カマド実測図 (1/40)



Ph.10 SC19カマド (南東から)

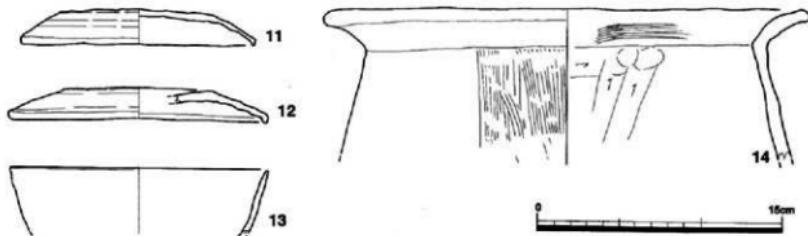


Fig.16 SC13出土遺物実測図 (1/3)



Ph.11 SC13カマド検出、土層断面 (北から)

た。燃焼部の幅(外法)は66cm、内法で約30cm、奥行き(外法)約70cm、内法約50cmを測る。そこから外部へ幅25cm、長さ20cmの煙道が接続していた。

#### 出土遺物

11はSC13のカマド周辺から、12はSC13の床面近くから出土した須恵器坏蓋。13はSC13-2のカマドから出土した土師器坏身。14はSC13の下部から出土した土師器壺である。

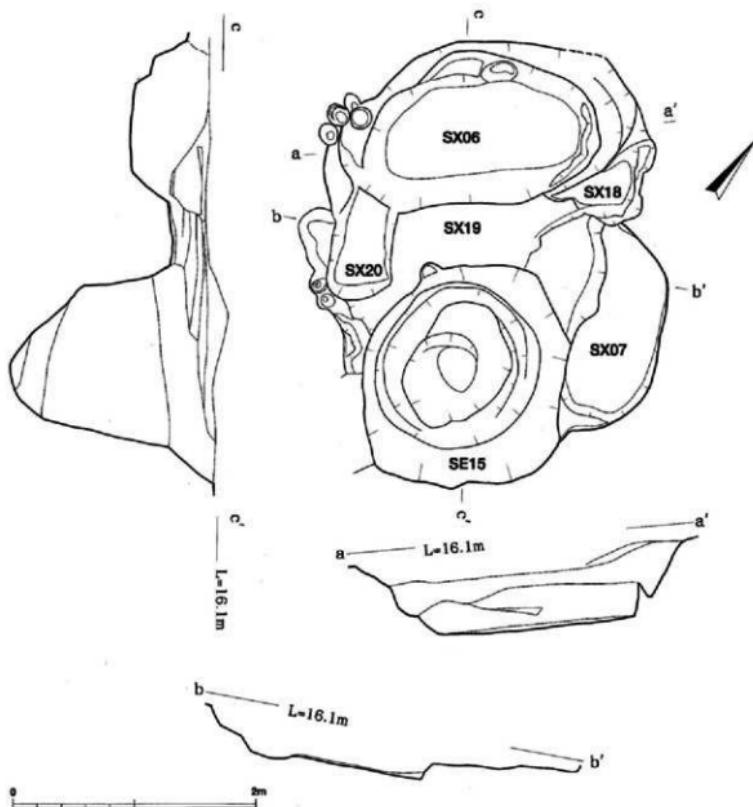


Fig.17 SX06、07、18、19、20、SE15実測図 (1/80)

### 3 土壌・井戸

#### (1) SX06

調査区南側で検出された。SC13、19を切っている。短軸長2.6m、長軸長5.1mの楕円形プランを呈し、深さは中心部で1.3mを測る。当初、深さ約50cm下げたレベルで黄褐色のロームを多く用い整地されたような面が検出され、竪穴住居跡の可能性を考えた。しかし、下部が深いことや形状からその可能性を否定し、土壌として記録した。出土遺物(15~17)の15、16は下層から出土した須恵器壺、17は上層から中層整地面までの土層から出土した土師器の鉢である。

#### (2) SX07、18、19、20

南側には井戸SE15のほか不整形の落ち込みが検出され、その中でSX07は方形に近いプランを呈し、深さは約20cmで底面が平坦であることから竪穴住居跡の可能性がある。また、SX19も深さ約60cmで比較的深く、基底面に起伏が多いが、竪穴住居の貼床とも考えられる。SX18は深さ約60cm、SX20は深さ58cm~65cmを測る。出土遺物の18、19はSX07から出土。18は須恵器壺蓋の擦み、19は内黒の黑色土器碗である。20はSX17から出土した須恵器壺身、21はSX18から出土した土師器壺身である。22、23はSX20から出土。22は土師器甕、23は移動式カマドの底である。

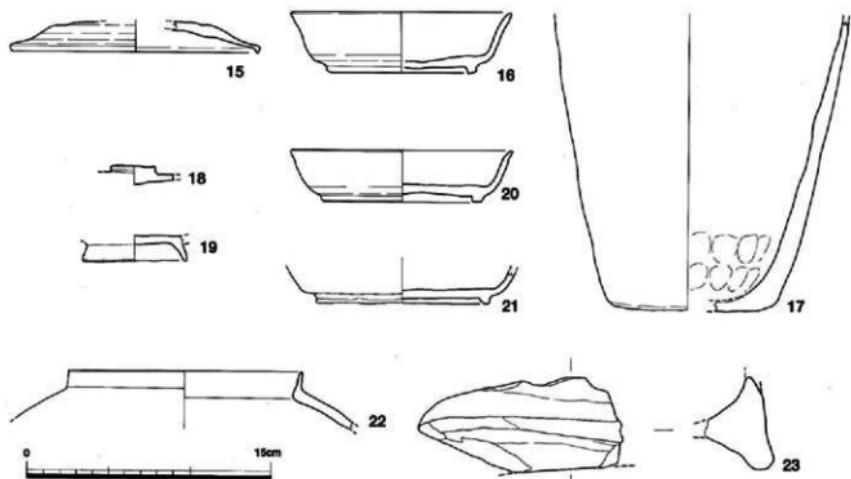
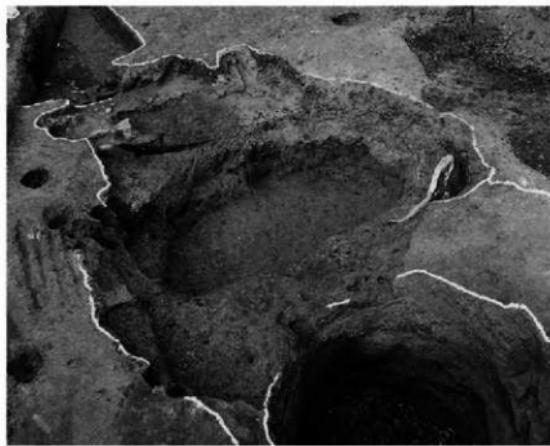


Fig.18 SX06、07、18、19、20出土遺物実測図 (1/3)



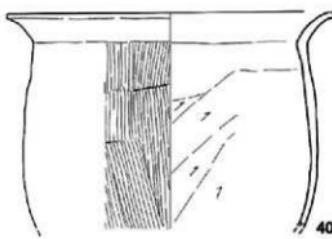
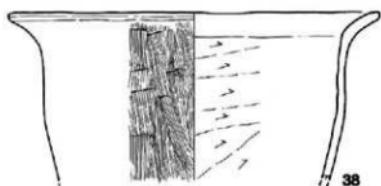
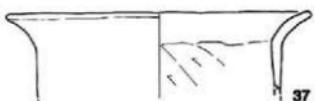
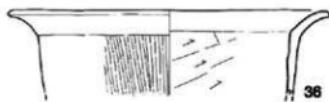
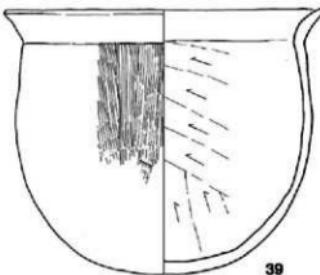
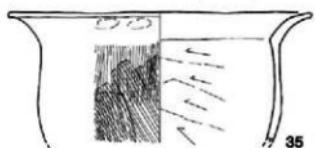
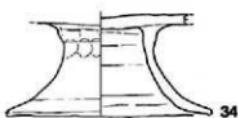
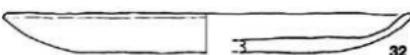
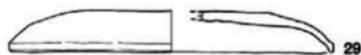
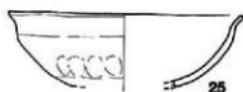
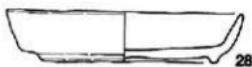
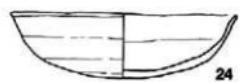
Ph.12 SX06、07、18、19、20、SE15発掘状況 (南から)

#### 出土物

24~43は27の黒色土器を除き土師器である。24、25は壺身、26は楕、27は黒色土器A類、28の土師器壺身は須恵器を模倣している。29、30は壺蓋、31は壺身の大形品、32は皿、33は大形の皿か壺の底部である。34は高壺脚部、35~43は土師器甕、44の甕頸部は屈曲が緩やかである。45

#### (3) SE15

調査区南側で検出された。上端は径3.6mの円形プランを呈す。中心部の深さは約3.4mを測り、鳥居ロームと灰白色粘土の八女粘土の境である深さ2m前後の位置から基底面に向かってそばまつっていく。井戸枠、井筒等は検出できなかったが、基底面中心部は径60cm略円形を呈し、井筒の痕跡を留めている可能性がある。



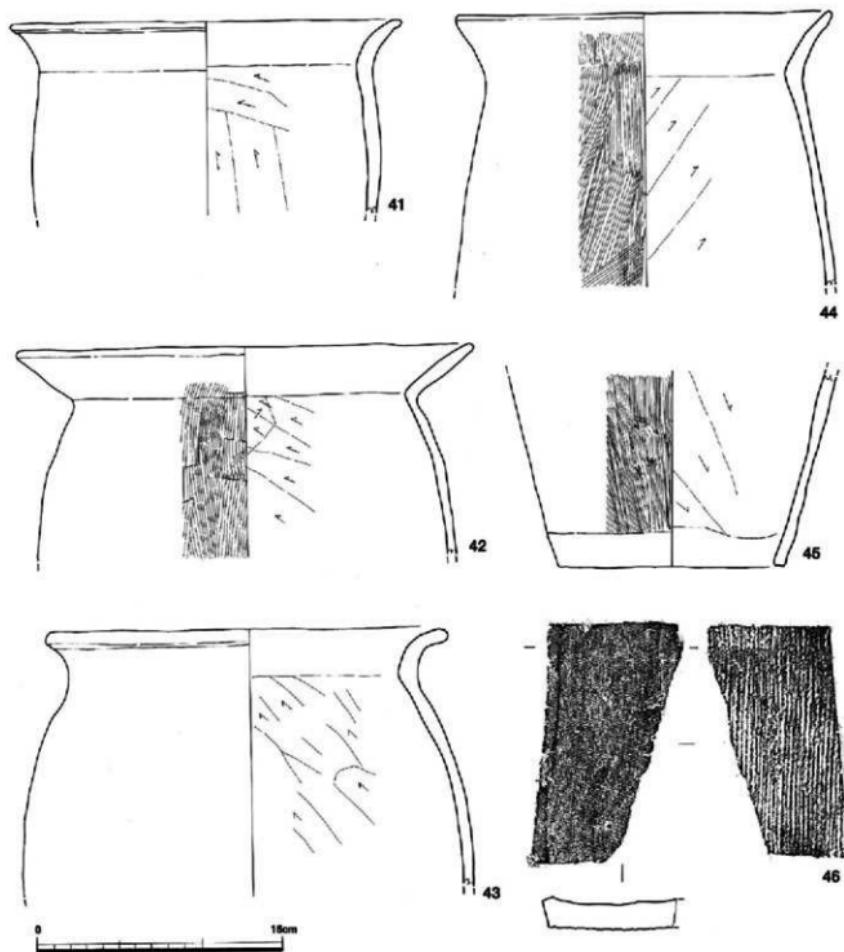
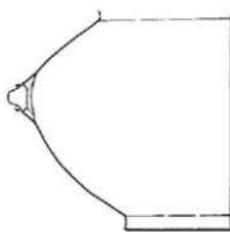
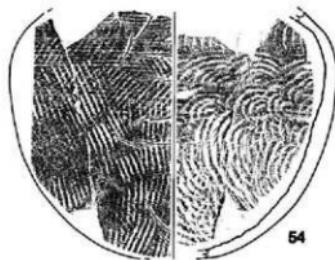
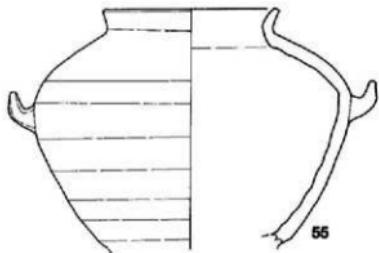
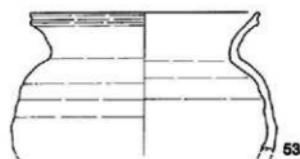
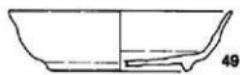
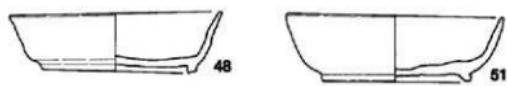
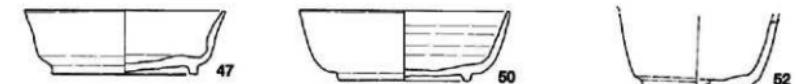


Fig.19 SE15出土遺物実測図1 (1/3)

は瓶底部。46の平瓦は凸面に網目タタキ、凹面に布目が残る。

56を除き、47~61は須恵器である。47~51は壺身、52は壺か。53、54は小型の甕。55、56は耳付甕。56は黄褐色を呈した軟質の土師器である。57は甕口縁部。58~61は長頸甕である。



0 15cm

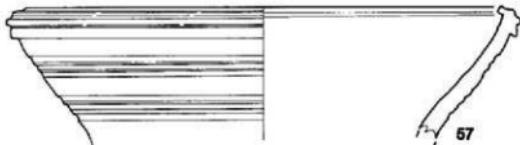


Fig.20 SE15出土遺物実測図2 (1/3)

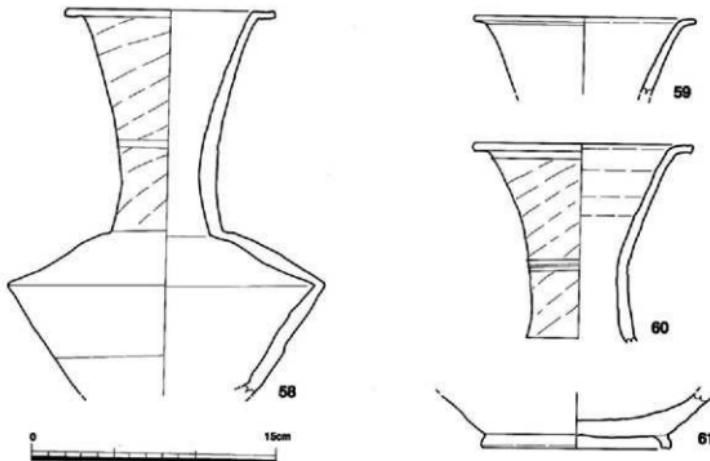


Fig.21 SE15出土遺物実測図3 (1/3)

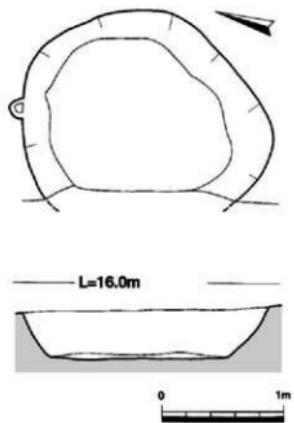


Fig.22 SK01実測図 (1/40)



Ph.13 SK01発掘 (東から)

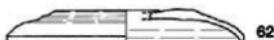


Fig.23 SK01出土遺物実測図 (1/3)

#### (4) SK01

調査区中央部の西壁際で検出された。径約2mの略円形プランを呈し、深さ43cmを測り、基底面はほぼ平坦である。出土遺物の62は須恵器壺蓋である。

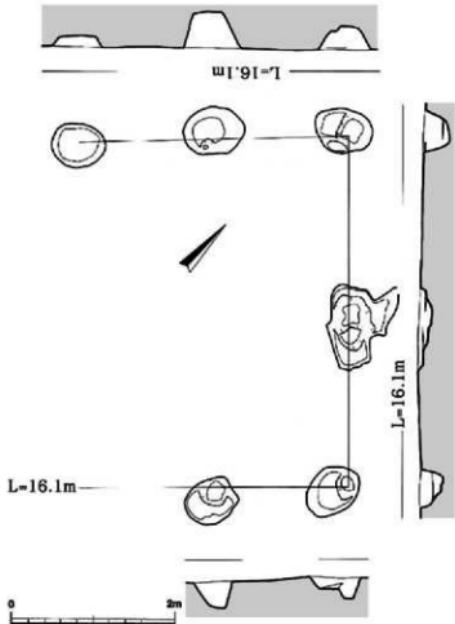


Fig.24 SB01実測図 (1/60)



Ph.14 SB01 (南から)

本調査区で検出されたカマドは竪穴部のコーナーに据えられ、煙道が水平に近く長く掘削されている特徴がある。カマドの向きについては火災を避けることも含め単位集団間で配置を決定することも推測されるが、位置についてはカマドの構造に関連すれば、時期差も考慮する必要がある。しかし、今までの調査においては時期差によるカマド位置の違いは認められていない。ただ、8世紀中～後半にかけて遺物時期差による形態変化が小さいことも注意される。

#### 4 掘立柱建物跡

##### SB01

調査区中央部で検出された。竪穴住居間に同方向で建てられていることから、竪穴住居跡と同時期に併存していたものと考えられる。2×2間で、梁行3.3m、桁行4.3mを測り、柱穴の配列は整然としている。

## IV おわりに

竪穴住居跡は8世紀中頃から後半までの半世紀に3回程度の建て替えがみられる。調査区内においてはSC02→SC03→SC14とSC19→SC13-2→SC13-1の変遷がみられ、両者にカマドの位置が北西から南側に変わっていく同じ傾向を看取できる。竪穴住居に挟まれたSB01は倉庫の機能をもつものか。SE15の埋没時期はこれらの遺構より1世紀近く降り、住居形態は掘立柱建物に変化したものとみられるが、削平と搅乱のため詳細は現時点では不明である。

周辺の調査で検出された竪穴住居跡の存続時期も8世紀中頃から9世紀初頭にかけて集中する同様の傾向がみられる。

## 報告書抄録

| ふりがな          | むぎの                                      |             |   |                    |   |                           |            |
|---------------|--|-------------|---|--------------------|---|---------------------------|------------|
| 書名            | 麦野A4                                     |             |   |                    |   |                           |            |
| 副書名           | 麦野A遺跡群第14次調査報告                           |             |   |                    |   |                           |            |
| 巻次            | 4  |             |   |                    |   |                           |            |
| シリーズ名         | 福岡市埋蔵文化財調査報告書                            |             |   |                    |   |                           |            |
| シリーズ番号        | 第859集                                    |             |   |                    |   |                           |            |
| 編著者名          | 荒牧宏行                                     |             |   |                    |   |                           |            |
| 発行機関          | 福岡市教育委員会                                 |             |   |                    |   |                           |            |
| 所在地           | 〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667 |             |   |                    |   |                           |            |
| 発行年月日         | 2005年(平成17年)3月31日                        |             |   |                    |   |                           |            |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地                              | コード<br>市町村  | 北緯  | 東経                 | 調査期間                                      | 調査面積<br>(m <sup>2</sup> ) | 調査原因       |
| 麦野A遺跡         | 福岡市博多区<br>麦野5丁目<br>5番39                  | 130<br>0048 | 33°<br>32'<br>43"                               | 130°<br>27'<br>55" | 20040202～<br>20040303                     | 260                       | 分譲住宅<br>建設 |
|               | 種別                                       | 主な時代        | 主な遺構  | 主な遺物               | 特記事項                                      |                           |            |
|               | 集落                                       | 奈良時代        | 堅穴住居<br>跡10軒、<br>土壤2基、<br>掘立柱建<br>物跡1棟、<br>井戸1基 | 土師器<br>須恵器         | 堅穴住居跡からなる集落。<br>据え付けカマドがコーナーに<br>設置されている。 |                           |            |

### 麦野 A 4

麦野A遺跡群第14次調査報告

2005年(平成17年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号  
印 刷 九州チューエツ株式会社  
福岡市博多区東比恵2-9-1